The Tokyo Branch Letter No.66 RSCDS東京ブランチ
東京ブランチレター January 2005
A Newsletter of the Tokyo Branch of the Royal Scottish Country Dance Society
Editor: Tom Toriyama, 6-9-21, Ohzenji-nishi, Asao-ku, Kawasaki 215-0017 Tel/Fax 044-988-7773

功労賞、池間先生に手渡される

悦子夫人・池間先生・五十嵐チェアマン

11月6日のRSCDS年次総会で池間博之先生にソサエティ功労賞が授与され、本部からとどけられた表彰状は功労賞受章者バッジとともに同14日、五十嵐成子チェアマンから池間先生に贈られました。

これに先立ち、11月3日池間先生の功労賞受賞を記念して祝賀ダンス会が東京乃木坂のホテルはあといん乃木坂で行なわれました。OB、カナダからのご友人をはじめ、各地から120人がつどい、先生の受賞を盛大に祝いました。

池間先生思い出の Book 19 からのダンスと、ニューヨークでSCDを勉強中彼女によく搾られたというティーチャー、 Miss Jeannie Carmichael を記念する同名のダンスがプログラムに組まれ、小海弘子（ピアノ）、大森ヒデノリ（フィドル）、菊池孝（フィドル、アコーディオン）の演奏で昼食、ティータイムをはさんで5時間のダンス会を楽しみました。中越地震による交通手段途絶のため、新潟県の会員が出席できなかったのは残念でした。

カーペットの損傷を懸念していたホテル側も、ダンスの内容を見て安心、テーブル、いすの出し入れを手際よくやってくれました■

東京ブランチ・クラス

（会場はそのつど変わります。毎月のクラス案内をご参照、または担当にお問合わせください）

ビギナーズ・クラス

2月14日（月）・28日（月）1.30-4.30
千代田区総合体育館5F
3月14日（月）・28日（月）1.30-4.30
4月11日（月）・25日（月）1.30-4.30
以降毎月第2・第4月曜日
講師　神倉那智子・佐藤仁美
¥600
担当　兼松千奈美　03-3752-6374

ステップ・ダンス・クラス

2月12日（土）1.15-2.05　講師　櫻井香枝
港区勤労福祉会館　¥300
以降毎月第2土曜日
担当　吉江紀美　043-237-4715

インターミディエイト・クラス（土曜クラス）

2月12日（土）2.15-4.30　講師　鈴木百代
港区勤労福祉会館（田町駅三田口5分）
3月12日（土）2.15-4.30　境　雅子
4月9日（土）2.15-4.30　中田多鶴子
幡ヶ谷社会教育館（予定）　¥600
担当　吉江紀美　043-237-4715

インターミディエイト・クラス（月曜クラス）

2月7日（月）1.30-4.30　講師　大井冨佐子
千代田区総合体育館5F
3月7日（月）2.15-4.30　加藤沙彌子
4月4日（月）2.15-4.30　五十嵐成子
¥600
担当　境　雅子　047-368-3873

アドバンスド・クラス

2月5日（土）6.20-8.45　講師　トム鳥山
童夢館（秋葉原）
3月5日（土）6.20-8.45　小幡正明
4月2日（土）6.20-8.45　近藤幸子
¥600
担当　大井冨佐子　03-3330-4676■

World Day of Dance – 2005

ユネスコは毎年4月29日をWorld Day of Dance「世界ダンスの日」と定め、各地でさまざまなダンス・イベントを行い、人々の親睦を図るよう推進しています。RSCDS はこの趣旨にしたがい、2003年から各ブランチに対し、4月29日にジャンルを問わずいろいろなダンサーに呼びかけてSCDイベントを行なうよう求めています。

東京ブランチは過去2年、実力が伴なわなかったため、この行事実施を見送ってきました。2004年度はようやく実施のはこびとなり、概略つぎのとおり開催いたします。

4月29日(金・祝)1-5時
東京北区・赤羽会館
(くわしくは後日ご案内します) ■

International Weekend
-東京ブランチ20周年記念-

1月28日-30日に鎌倉プリンスホテルで行なわれるウィークエンド、11月中旬のご案内送付直後から申込が集中し、12月初めには定員100名に達しました。その後も「どうしても参加したい」との申込が引き続き、定員を130人(通いの4人を除く)に増やしましたが、これ以上の増員は困難でした。やむをえずお断りをご連絡したかたにおわび申しあげます。

RSCDS サマースクールその他で宣伝につとめましたが、やはり日本ははるかな国、物価高の国のイメージが浸透しているようで、外国のダンサーからのエントリーは2名のみでした。

楽しい思い出がたくさん残るイベントになるよう、願っています■

Ice Cream and Chopsticks の一部変更

上記 International Weekend のボール・プログラムに入っているパット・クラーク作の Ice Cream and Chopsticks、パットから踊りやすくするため、つぎのように一部変更したとの連絡です。当日は変更後の踊り方で踊ってください。

Bars 9-16
旧：1st couple dance reels of three on opposite sides giving right shoulder to first corner. 1st couple finish on opposite side in the centre facing down.

新：1st couple dance reels of three on opposite sides, **1st woman giving left shoulder to first corner, and 1st man** giving right shoulder to his first corner. 1st couple finish on opposite side in the centre facing down.■

松橋順子さん逝く

第1回東京ブランチ賞受賞者の松橋順子さんが11月21日、ご逝去されました。69歳でした。前号のブランチレターにあるとおり、順子さんは東京ブランチに多大の功績を残され、これからもずっとご活躍を切望されていました。あまりに早いご逝去はほんとうに残念でなりません。

RSCDS 本部におけるブランチ賞表彰状のデザイン決定・完成が遅れたため、ご生前に表彰状をお届けすることができず、このことが役員一同大きな心残りです。

ブランチ賞表彰状は12月12日、五十嵐成子チェアマンからご遺族に手渡され、ご霊前に捧げられました。海外からの数多くのお悔やみのうち一部を紹介します。

イアン・ホール夫妻から:順子が亡くなったことをきき、とても悲しい思いだ。彼女はむかしからサマースクールで友人だった。もう会えないんだね。順子は東京ブランチをとおして日本におけるSCDに、ものすごく貢献した女性だ。私たちの心からのお悔やみを、ご家族と東京ブランチに送る。

ベルファスト・ブランチから:東京ブランチの元チェアマンであり創立者の一人であった松橋順子さんご逝去の報に接し、心からお悔やみ申しあげます。

わがブランチのたくさんの会員がサマースクールで彼女との友情を育んできましたし、彼女がセシル&エルマ・マコースランド宅を訪れた際には、当地のクラスで彼女自身にちなむダンスを指導してもらったこともあります。彼女が日本でいかに SCD を普及させ、スタンダード向上につくしてきたか、われわれも十分に承知しています。

私たちの心からのお悔やみを、ご家族と東京ブランチ会員に伝えてください(セクレタリ　ブライアン・パターソン) ■

ダイヤグラム、800 冊の注文

(Tom Toriyama)

11 月にブランチショップからご案内したダイヤグラム（「グリーンブック」は日本でのみ通用する名称）第８版は、締切りまでにポケット判・机上判あわせて 788 冊のお申込があり、急遽英国発行元に追加注文を行なう必要が生じ、いささかあわてました。

年末に到着した800冊のボリュームは２立方米、早く発送しなければ行く年来る年をダイヤグラムに埋もれて過ごすはめになるため、鋭意発送につとめました。

また Book 44 ビデオは予想を上回る約 100 本のお申込をいただき、「１ダースなら安くなる」で廉価購入できたため、値段の一部を注文者にご返金しました。製作者のマルカム・ブラウンは「日本を除く世界各地からの合計が 50 本、たまげたね」といっていました。これも 21 キログラム、１立方米の貨物で到着し、郵便局仕事始めを待って発送しました。

英国でも NTSC 方式のビデオをダビングするのが困難になりつつあり、Book 45 は DVD となります。

なお、一部のビデオに音声、画像が出ないという品質不良がみられました。お心あたりのかたはショップ担当トム鳥山にご連絡を■

ご不要の年賀はがきを支部に

お宅にご不要となった年賀はがきがあれば、どうぞセクレタリ中田多鶴子にお送りください。

昨年は多くの年賀はがきをいただいたうえ、神奈川の N さんからは「祖父が集めていたものだけれど」と、十数万円に相当する記念切手シートのご寄付があり、支部の通信費支出低減に活用することができてたいへんありがたく重宝いたしました。

１枚、２枚でも結構ですので、ご協力をお願いいたします■

東京支部役員改選

支部運営委員の任期は１年間のため、晩春または初夏に予定されている次期年次総会において 2005 年度運営委員を選挙します。

立候補（推薦を含む。以下同じ）されるかたは選挙管理委員までお申し越しください。

選挙管理委員
池間悦子 T/F 045-982-8528
若松陽子 T/F 045-593-2446
立候補締切り　5 月 10 日

推薦の場合は必ず被推薦者の同意を得てください■

20 周年記念誌の発行

東京ブランチ創立 20 周年を記念して、6月をめどに記念出版物を発行することになりました。みなさんから2月末までに原稿・写真をいただき、まとめたいと考えています。

1. 原稿提出のお願いがあったときにはこころよくお引き受けくださるよう、お願いいたします。
2. 20 年の歩みを示す写真、資料などをお持ちでしたら、どうか記念誌担当までご連絡ください。

記念誌担当：大井冨佐子 T/F 03-3330-4676
165-0032 中野区鷺宮 2-10-14

RSCDS サマースクール2005

-2006 年はサマースクール 75 周年-

7 月 18 日(月)-24 日(日)　7日間
7 月 24 日(日)-31 日(日)　8 日間
7 月 31 日(日)-8 月 7 日(日)　8 日間
8 月 7 日(日)-14 日(日)　8 日間

第 1 週に参加する人はその分、参加費減額があります。申込用紙はセクレタリにお問合わせされるか、RSCDS インターネット(www.rscds.org)からも用紙を入手することができます。

来年 2006 年はサマースクール 75 周年にあたり、特別メニュの実施が予想されます。ふだんどおりのサマースクールをお好みの人はことし、特別行事を体験したい人は来年、両方を味わいたい方はそう、両方に参加されるとよいでしょう■

RSCDS 東京支部

チェアマン　五十嵐成子
T/F 048-445-1527
セクレタリ　中田多鶴子　T/F 0297-64-9486
〒301-0855 龍ヶ崎市藤ヶ丘 5-7-5
Email: wbnsd292@ybb.ne.jp
トレジャラ　松村　茂　T/F 047-371-9054
委員会メンバー　大井冨佐子 03-3330-4676
兼松千奈美 03-3752-6374
境　雅子　047-368-3873
トム鳥山　044-988-7773
吉江紀美　043-237-4715
ホームページ　www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/
同担当　吉澤敦子　T/F 0298-41-0767■

運営委員会報告

9月14日

（1）ホテル側との折衝結果を得て、International Weekend のクラス、ボールなどの時間割をきめる。

（2）同会費額から算出される飲食の内容を討議。

（3）Book 44 Dances 講習会で配布したダイヤグラム、希望者に実費送付をきめる。

9月26日

（1）池間先生祝賀会の準備状況を確認。

（2）ブランチ賞送付申請書を 9 月 10 日に送付済み。2 週間以内に送られてくる見込み。

10月1日

（1）池間先生祝賀会の参加申込みは本日現在 50 人。

（2）ブランチ賞は本部委員会で報告後、表彰状を送付するとの連絡。

（3）アン、レイチェル&デイブは終了後、京都を観光し、関西空港から帰国する。経費は彼らが負担。

（4）International Weekend のボールのプログラムをきめる。

（5）仙台の有志からブランチ結成の予備申請書が本部に送られたとのこと。

10月31日

（1）池間先生祝賀会の準備状況を確認。

（2）ブランチ賞表彰状のデザイン、本部でいまだ検討中。

（3）International Weekend のボール演奏時のデイブとのギャラ交渉結果を了承。（4）出版物の会員直接送付のため、本部から支部全会員のローマ字住所を 11 月末までに送れとの要請に対し、入力に時間を要するため 2005 年 3 月まで待ってほしいと回答。

（5）中越地震で新潟県在住の会員 27 名は全員無事を本部に連絡。

（6）2005 年度の行事計画を 12 月の委員会で討議する。

11月12日

（1）池間先生祝賀会の反省・評価を行なった。

（2）World Day of Dance – 2005 を本部要請にもとづき 4 月 29 日に行なう。具体化を検討してゆく。

（3）ブランチレター内容について討議。

12月4日

（1）本部 AGM について鳥山から報告。

（2）International Weekend は申込み集中といえる。ボール MC を内定し、当人の了承を得ることとする。飛行機座席の予約変更によりアン&レイチェルの滞在が 1 日伸び、大阪でクラスを行なうことを検討中。

（3）20 周年記念誌発行をきめる。担当は大井・兼松・水谷（大井友人）。

（4）World Day of Dance 会場は赤羽会館を予約した。日本ではオープンエアでやることが困難だが、関係先を打診してみる。

（5）2005 年度の行事計画を討議。

（6）ブランチ賞表彰状、詫び状とともに本部からやっと届く。近日中に松橋さんご遺族にお届けする。

1月7日

（1）International Weekend は定員枠増大でホテル了承を得たが限度があり、申込みの遅かった人にはあきらめてもらわざるをえない。講師送迎時のアテンド担当、クラス通訳を選考。クラス通訳は前回と同様、生徒が混乱する場合のみ手伝う。

（2）アン&レイチェル滞在 1 日延長で、2 月 2 日夕刻関西ホワイトヘザーダンサーズでクラスを行なう。

（3）20 周年記念誌は原稿締切 2 月末、配布は支部年次総会時をめどに進める。

（4）World Day of Dance は SCD に限らず、各種ダンスもプログラムに入れたい。

（5）5 月以降のブランチ各クラスの講師未定のため、2 月中旬までに各ティーチャーに意向を聞ききめてゆく■

これからの委員会日程

2 月 5 日（土）
3 月 5 日（土）
4 月 2 日（土）

ご意見ご感想など、委員会は大歓迎しています。各委員にどしどしお寄せください■

2005年度ブランチ行事予定

2005 年

4 月 29 日	World Day of Dance
6 月 4 日	年次総会
8 月 28 日	Book 45 講習会（その 1）
9 月 18 日 または 4 日	Book 45 講習会（その 2）
10 月 16 日	協賛 - Bill Clement さん 来日 30 周年行事

2006 年

1 月 7 日 または 15 日	New Year Dance 2006
2 月 17－18 日	ティーチャー研修会（同下）
2 月 18－19 日	合宿（石川島研修ｾﾝﾀｰ）■

中央ドイツ・ブランチから礼状

新たに生れたセントラル・ジャーマニー・ブランチにお祝いのカードを送ったが返信はまだない、と前号のブランチレターで述べた直後、同ブランチからお礼のカードと写真がとどきました。

『東京ブランチへ。ドイツ最初のブランチにすてきなカードと祝辞、ほんとうにありがとう。6月末から本格的に活動をスタートしました。喜ばしいことに、この短期間に積極的な会員 51 名と遠方の会員2名を獲得しました。先日の土曜日はわが家でわたしの誕生パーティを開き、カードに会員が寄せ書きしてくれました。これからもよろしく。セクレタリ - マルティナ・ミュラーフランツ。ドイツ・ランゲンフェルト 2004.9.16』■

前列左からアニカ・マグレガー(副チェアマン)、ビルギット・フレック(トレジャラ)、カロル・フィッシャー(チェアマン)1人おいてマルティナ(セクレタリ)

マニュアルの発行は 2005 年春

- 本部理事会報告 -

(本部議事録 2004.10.9 & 11.27 から抜粋)

＊10/9 の理事会がジーン・マーティンにとって任期最後の理事会で、全理事に対して感謝の言葉が述べられた。ジーンの見解として、

1．理事の数はまだ多すぎる。
2．短期のプロジェクト・グループによる案件処理を活用すべきである。
3．ソサエティのイメージはある分野においては、いまだよくなっていない。PR により注力してほしい。

＊11/6 の AGM ブランチ・フォーラムの報告書が回覧され、理事会への新たな課題付与が認識された。

＊11/22 から新たにジル・ヘンダーソンが本部スタッフに加わる。

＊11/27 までに 22 のブランチからブランチ賞授与が報告された。

総務・財政委員会

＊懸案だった VAT 問題はすべて解決した。

会員サービス委員会

＊マニュアル改訂版は印刷直前状態にあり、2005 年の初めには刊行される見込み。

＊CD 化にあたり、Book 6 から 34 中、16 の要録音ブックが残っており、優先順位を持ち寄る。

＊残念ながら Book 44 の 2 つのダンスは既出版のものであった。委員会は出版手順を見直すことにした。

教育訓練委員会

＊新試験制度によるユニット 1 の試験は、2005 年 3 月と 6 月に世界各地で行われ、以後 4 ヶ月ごとに実施される。

事務局から

＊既発行のビデオは DVD 化を図ってゆく。■

3つの「も」
ーステップダンスのお勧めー

吉澤敦子

毎月第2土曜日 11 時、家の事情が許す限り、1時15分からのステップダンスに出席するため家を出、土浦から常磐線で 1 時間あまり・・・幡ヶ谷の会場に駆けつけます。遅れては「もったいない」し、「もうし訳ない」。ああそれなのに、出席者は少ないのです。私は昔からステップダンスが大好きです。優雅な身のこなし、親しみ易い音楽、それに懇切丁寧な櫻井香枝さんの指導。毎回でも行きたい位です。

ダンスに一番重要なポイズ(バランスのとれた姿勢と動き)、つまり、髪の毛を上に引っぱられている気持ちでまっすぐに立つ、前進・後退・回転の時に上体を前傾しない、のけぞらせない、左右にぐらつかせない。この姿勢で踊り続けるのは、やさしいことではありません。すぐできることでもありません。

スコティッシュ・カントリー・ダンスでフォーメーションやフレージング、踊る順序がわかっていても、この基本的な姿勢ができていなくては、台無しです。ステップダンスではダンスを習っているうちに、このようなポイズが自然に身に付くようになるのです。

さいごの「も」、2 時 15 分からのインターミディエート・クラスにご出席のみなさん、「もう1時間」早く家を出て、ステップダンスにご出席ください。スコティッシュ・カントリー・ダンスも、もっと美しく踊れるようになれますよ。(あっ、4つの「も」でした)。

The Wishing Well と Hand in Hand

（ミニー・ベニンガー、スイス）

わたしのダンス、The Wishing Well と Hand in Hand について、そのいわれを書きましょう。

The Wishing Well ですが、わたしのグループに１人のレディがいます。あるときその人が「わたしにちなんだダンスがあればうれしい」というので、「wishing well 願懸け井戸を見つけてお祈りしたら」と答えながらも、このダンスをつくったのです。まもなく彼女は 50 歳の誕生日を迎え、このダンスを彼女に贈りました。ダンス説明書一式は和紙に書いて贈ったのです。

Hand in Hand - もう一つのグループに、とても無口で恥ずかしがり屋の青年がいます。かれは３年間踊っています。ある晩のこと、かれはルーマニアの美人をつれてやってきました。バレエ・ダンサーでした。ほほえましいカップルです。最初のダンスは２人で一緒に踊り、つぎの踊りではパートナーを変えるよういいました。２人は恋を引き裂かれるかのようでした。手を離すのがいやだったんですね。２ダンス目が終わるとさっそくかけよって、また手を取りあっているんです。

この踊りで、1st couple の動きは右回りばかりですが、２人はここにやってきたときから、休憩中も音楽にあわせたがいに腰に手をまわしたまま、ぐるぐる回るのです。それにあてられ、わたしもクラクラとめまいを起こすほどで、それも時計回りばかりだったのです。

こうして２人は 2002 年 6 月 14 日に結婚し、この踊りをプレゼントしたのですが、２年後の 2004 年 6 月 14 日には赤ちゃんが生まれたのです。信じられないでしょうが、ほんとうの話よ■

“ダンス”と“曲”の混同、そろそろやめたら？

（Tom Toriyama）

英語で dance と tune は、はっきり別の言葉になっている。日本語に訳せば、前者は踊り、ダンスであり、後者は曲、チューンである。何をいまさら、とお考えかもしれないが、ではみなさんこういう使い方をしていないだろうか？

『きのうのクラス、何曲踊ったの？』あるいは『その曲、ぼく踊ったことないよ』

フォークダンスでは1つの曲を何回も繰り返して１つの踊りを踊るので、このような使い方でも誤りではない。ハバナギラは、ハバナギラ以外の曲で踊られることはない。

もうみなさんご存知のように、8x32 のスコティッシュ・カントリー・ダンスを踊る場合、使われる曲数は最低でも３曲、ふつうは４曲、多ければ８つである。もしも Miss Gibson's Strathspey で The Music o'Spey を８回繰り返し演奏でやられたら、４回目あたりで、いいかげんにしろとダンサーはバンドに怒りをぶつけるであろう。

SCD では、“曲”と“踊り”は個別な存在であり（指定曲というひもつきはあるにせよ）、上記の会話は、

『きのうのクラス、何ダンス踊ったの？』あるいは『その踊り、踊ったことないよ』に改めたほうがよい。日本語では靴は１足、たんすは１棹というように数え方にきまりがあり、ダンス数を指すのに慣用的に“曲”を使うのはやむを得ないかもしれないが、できるだけ“踊り”、“ダンス”を使ってほしい。

先年、日本の某ダンス・グループがダンスブックを発行した。表紙の題名は「･･･記念曲集」である。中身に楽譜は皆無、すべて創作ダンスの説明書であった。“曲”と“ダンス”を混同して使っていると、このようにおかしなことが無意識に生まれてしまう。

そろそろ“ダンス”と“曲”の混同をやめてはいかがだろうか。少なくとも書き物の上では、はっきり区別すべきである■

RSCDS 年次総会参加記

（ケン春日）

11 月 5 日（金）早朝パリ、シャルル・ドゴール空港からエジンバラ行きに乗る。左座席１列、右側２列の小さな飛行機である。この時期、この時刻にパリからスコットランドへ行く人は、仕事以外ではよほどの物好きである。

ちょっと脱線するが、2 月、ウィンタースクールに行くときは、エジンバラ空港からすぐにタクシーでピトロッホリーへ行くのがよい。タクシードライバーとがんがん交渉すると 90 ないし 100 ポンドですむ。一番安かったのは３年前の 70 ポンドである。バスと汽車を乗り継いで、底冷えのするピトロッホリー駅でタクシーを待っていると、体の芯まで冷え切ってしまう。３人なら空港からタクシーのほうが安いし、２人でも快適さを考えるとそのほうがずーっとましである。

きょうはわりあい暖かな天候と、ボールの開始までたっぷり時間があるため、評判の悪いスコットランドの汽車で行くことにした。パースまで単線、ゴットンゴットンと汽車旅を十分味わえる。いまはバーバリ社と一緒になったが、名門スコッチハウス社とのライセンス契約ではじめてスコットランドを訪れたのは 1960 年代、ロンドンから豪華列車フライング・スコッツマンでエジンバラへ行った。その先はもくもくと煙をはく、重連の蒸気機関車が客車を引っ張っていた。いまはヂ

ーゼル。まだ多少紅葉の残っている晩秋のスコットランドを車窓からながめる。後席の女の子は携帯電話でしゃべりっぱなし、斜め前の年配の女性は刺繍に余念がない。パースに到着後、ホテルへ。

20時からコクテルのあと、ボールである。ドレス・コードはフォーマル、七百数十名参加で、会場はベル・スポーツセンターの大きなホールである。ベル・ウィスキー社がかなりの建設支援をしたとのことでその名を残している。音楽はアレスター・ウッド・バンド、MCは前半ブルース・フレイザー、後半はアレックス・グレイである。なじみの20ダンスほどをつぎつぎと踊る。リカップはもちろんない。

翌11月6日午前のブランチ・フォーラムはトムにまかせ、わたしたちは10時45分からのジェネラル・クラスに参加する。テレサ・ライトの指導で3ダンスをウォーミングアップ程度にこなす。ショップにはダイヤグラムの新版が売られていた。14時半からAGMである。ジーン・マーティンがチェアマンとして最後の開会あいさつ、マンスフィールド伯爵のあいさつがあり、つぎにソサエティ功労賞の授与に移る。

ジーンにより受賞者の功績が読み上げられる。池間先生の紹介は、ニューヨークでスコティッシュ・ダンスをスタートし、ミス・ミリガンに師事して1984年に東京ブランチを設立、ミスタ・イケマは日本におけるスコティッシュ・ダンスの父であり、松橋順子さん、岡田昌子さんなど多くの指導者を育成し、スコティッシュ・ダンス発展のために多大な貢献をされた、というものであった。功労賞は池間先生代理のトムが拝受した。

このほかの受賞者は、
ボビー・ブラウン（カナダ）
クリスティン・トレイナー（グラスゴー）
サリー・ディー（米ボストン）
エルマ・マッコースランド（ベルファスト）
ジェニファー・ウィルソン（フォカバー）
ペギー・スパス（ダンズ）
ジョージナ・フィンリー（トロント）
マリリン・ジェフコート（本部トレジャラ）
アリス・マーフィ（カーライル）。

アリスのとき、代わりに受賞した夫君のジョー・マーフィが「本人が直接受賞できたら、どんなに喜んだことでしょう」とスピーチし、会場の涙をさそった。

会長、副会長の再任承認、年次報告、会計報告、監査報告が形式的に続き、年会費の提案にうつった。25歳以下の会員と、同居するカップルについて片方の会費額を80%に減額するとの提案である（発議ロンドン支部？）。前者はすんなり承認されたが、後者は否決となった。否決の理由は本部の台所を考慮しろとか、80%会員は被差別対象になるとかいうものであった。

次号ブリティンとBook 45をもってこの形式での出版は最後となる。ブリティンは隔年発行のマガジンに、ダンスブックは新しやり方（検討中）に変わるためである。

ジーン・マーティンが感謝のことばを述べて議長席から降り、新チェアマン、スチュワート・アダムが登壇してスピーチ、新役員紹介があり、16時30分、英国人でさえトゥー・マッチ・フォーマルというくらい格式ばったAGMは閉会した。

19時半ソシャル・ダンス開始。この日はインフォーマル・ドレスである。音楽イアン・マクフェイル・バンドで20ダンスを楽しく踊る。

11月7日10時半から講義、ミーティング、クラスなどがプログラムされている。これはことし初めての試みで、いままでは昨晩のボールのあと解散であった。わたしたちはDance Devisers' Workshopに参加した。講師ディレク・ヘインズ、音楽ジェニファー・ウィルソン、よい勉強になった。12時半、解散。

追記：キンギューシ訪問

AGM終了後、ピーター&パット・クラークの車に便乗し、パースから1時間強のキンギューシへ。クラーク邸で3泊した。かなり大きな家で、引っ越してから3年目という。1階に広いリビング、主寝室、ピーターの書斎、パットの家事室、キッチン、バス&トイレがあり、2階に広い音楽ルーム（ここでリハーサルやら行なうとのこと）、客室2部屋、バストイレ。快適な住いだ。パットの性格か、花など飾ってきれいにしている。

このあたりまで来ると晩秋というよりも、初冬といったほうがよい気候だ。よい天気に恵まれ、近隣の湖や丘陵、古城をドライブし散策する。夜はピーターが校長をしていたころの話や、パットとアレックス・グレイが大学で同窓だったこと、ピトロッホリーへ毎週指導に出かけているなどを話す。リンダ・ゴールともかなり親しい。わたしたちが帰ったあと、ジェニー・グリーンが週末から泊まりにやってくるそうで、人のつながりがよくわかる。（ジェニー・グリーンの優雅な踊り方はわたしたちも大好きで、いつか日本で指導してほしいと願っている）。

秋の夜長で話に花が咲く。パットの英語は語彙豊富で格調高く、理解に苦労するほどである。ゲール語、スコットランド語にも明るいようで高い教養に感服した。11月10日、エジンバラにかれらはフラット（日本でいうマンション）を持っており、そこに行くというので好意に甘えてエジンバラ空港まで車に便乗させてもらった。エールフランス機でパリへ。思い出深い旅となった■

The Gay Gordons takes over in the home of golf

Foreign invasion leaves St Andrews reeling

ST ANDREWS is famous as being the home of one of Scotland's greatest exports — golf.

By Kathryn Mainds

But the Fife town also plays its part in exporting one of the country's other greatest assets — Scottish Country Dancing.

Since 1925 the Royal Scottish Country Dance Society (RSCDS) has been holding its annual summer school there.

And this year's no exception. The historic town is currently awash with kilts, as around 1000 musicians and dancers from every corner of the globe have been descending upon it.

They come in all shapes and sizes and cover all age ranges, from sprightly Russian teenagers to nimble-footed Australian pensioners, and from experienced dancers to the intrigued novices.

Huge task

Linda Gaul, RSCDS Schools Director, has the huge task of organising the four weeks of summer schools.

Speaking to me as she showed me round the various venues, Linda told me how her love of Scottish country dancing was actually born in London.

She explains, "I was born in Glasgow but we moved down to London. My dad was a weather forecaster and tended to work 12-hour shifts.

"So my mum and I needed to get out of the house and she started taking me along to country dancing."

From then on Linda was hooked and has been a regular at the summer school in St Andrews since she first attended as a teenager with her parents.

And it seems that others who have been to the summer school have been converted overnight. Many now come year after year, forging strong friendships with fellow dancers and musicians.

Linda laughs, "Sometimes we get a reluctant spouse who has come along to learn and been roped into going to our beginner classes — and we get another convert!"

Best exercise

Linda's keen to stress that although there's a strong international element, Scots shouldn't be put off, and is keen to see more natives take it up.

"It's the best exercise you could get," she enthuses.

"It keeps your mind active because you have to know where to go and it's extremely good socially.

"And in terms of the Government tackling the nation's rising obesity levels, this is a great way for people to get fit and can be done at all different levels. You don't even need any special kit — just a good soft comfortable pair of shoes!"

Novices and teachers alike take part in the various different levels of classes and at night everyone gets together for social dancing and the musicians can have a shot at trying out the tunes.

From the "32-some" reels at 8 am that have been known to take place on the lawn outside the University Halls, where the visitors stay, to the odd paddle down the beach to soothe the aching blisters from a hard day's dancing, everyone is beaming.

I visited a class where the teachers were being taught a new dance, *Festival Fling*, devised by a group in Adelaide. Fun and laughter seemed to be the order of the day.

Class teacher Irene Bennett from St Andrews has been teaching for an incredible 40 years.

But some of her classmates had travelled a little further.

Puka and Angus Henry came all the way from Darwin, Australia. Puka beamed, "Both my husband and I teach. My husband's from Scotland and we come here every second year."

Hideko Harada flew over from Kyuishu in Japan. "I've been teaching in Japan for seven years. I first learnt there when I was 18.

"I love it here. It's great fun."

The summer school started on July 18 and is running until August 15. There are still limited spaces available for a week's course priced at around £355 a week for board, lodgings and all classes.

For more information contact the RSCDS on 0131 225 3854.

■ Tom Toriyama from Tokyo and Hideko Harada from Kuishu start the dancing.

外国人、セント・アンドリュースのダンスを占拠す

RSCDS のサマースクールの記事が現地の新聞に載り、写真には九州の原田秀子さんと東京のトム鳥山さんが写っています。記事のコピーが尾崎一恵さんのところに送られてきました。サマースクールに興味をもっている方が多いと思いますので、記事の日本語訳を掲載します。**（鈴木三枝子）**

ダンスを楽しみに世界中から多くの人がセント・アンドリュースにやってくる（訳者注．reeling はダンスを意味するとともに、困ったこと・動揺するなどという意味があり、２つ意味を掛けています。裏の意味は“セント・アンドリュースは外国から侵略者がやってきてたいへんだ”）。

ハッピーなダンサーたちがゴルフのふるさとを占拠する（これも Gay Gordons がハッピーなダンサーと、スコティッシュ・ダンシング、２つの意味を掛けています）。

キャサリン・メインズ記

セント・アンドリュースはスコットランド最大の輸出品であるゴルフのふるさととして有名だが、このファイフ半島の町はスコットランドのもう一つのすばらしい遺産、スコティッシュ・カントリー・ダンスの輸出にも一役買っている。1925年以来 RSCDS は年に一度のサマースクールをこの町で開いている。ことしも例年のように、この歴史的な街はキルトであふれかえっている。ダンサーやミュージシャンが約 1,000 人、世界中からこの町に集まってくる。快活なロシアのティーンエイジャーから軽やかなステップのオーストラリアの年金生活者まで、そして、経験豊かなダンサーから好奇心いっぱいの初心者まで、バラエティーにとんだ人たちが集まっている。

膨大な任務

RSCDS のサマースクール・ディレクターであるリンダ・ゴールは、４週間にわたるスクール全体を統括する途方もない任務を負っている。スクールのいろいろな場所を案内してくれながら、リンダはかの女の SCD に対する愛はロンドンで生まれたと話してくれた。

「わたしはグラスゴー生まれだけれど、すぐにロンドンに引っ越したの。父は気象予報官で 12 時間のシフトで働いていたので、母とわたしは家

に居れないときがあり、母がわたしをカントリー・ダンスに連れて行ってくれたのです」

それ以来リンダはこのダンスにはまってしまい、ティーンエイジャーのメンバーとして両親と一緒に RSCDS のサマースクールに参加し、その後毎年来ることになった。

「サマースクールに参加した人たちは一夜にしてヤミツキになるわ」ダンサーやミュージシャンとの友情が深まり、毎年サマースクールにやってくるようになるそうだ。

「なかにはダンサーのご主人や奥さんに連れられ、しかたなくサマースクールにやってきて、初心者コースに行かされる人もいますが、かれらもすっかりダンスのとりこになってしまいますよ」と、リンダは笑って話してくれた。

最高の運動

「もちろんこのダンスはいろいろな国の人たちが踊っているという国際的な要素もありますが、スコットランド人を忘れてはなりません。もっと多くのスコットランド人が踊ってくれることを願っています」とリンダは強調していた。

「ほんとうに最高の運動になりますよ。踊っていると、頭も活発に働かさなければなりません。だって、自分がどこに行くかを絶えず考えていないといけないですからね。そのうえ、とても社交的でいいですよ。政府は肥満対策を考えているようですが、国民がスマートになるためにも、いろいろなレベルで行なえるこのダンスは最適ですよ。それに特別な道具も要りませんしね。やわらかい皮のダンス・シューズさえあればいいのですから」と、リンダは熱っぽく語ってくれた。

スクールは異なったレベルのクラスがあり、夜にはみんなが集まり、ダンスを一緒に踊り、ミュージシャンたちは練習した曲を弾いてみる。1日は朝8時、ダンサーたちが泊まっているユニバシティ・ホールの外の芝生で踊る Thirty-twosome Reel で始まり、1日の終わりにレッスンで疲れ、痛くなった足を浜辺の水にひたしていやすまで、1人1人が輝いている。

先生レベルの人たちが新しいダンスを習っているクラスをのぞいてみた。オーストラリア・アデレードのグループが作った Festival Fling というダンスをやっていた。楽しく、笑顔で踊るのがその日の課題のようだった。

ティーチャーのアイリーン・ベネットはセント・アンドリュース出身で、とても信じられないが、40年近くも教えている。このクラスの生徒の何人かは、はるか遠くからやってきている。プカ&アンガス・ヘンリー夫妻はオーストラリアのダーウィンから来ていた。

「わたしたちも教えています。アンガスはスコットランド出身ですが、わたしたちは隔年ごとにここに来ています」とプカは話してくれた。

原田秀子さんは日本の九州から来ていた。

「わたしも日本で教えて7年になります。ダンスは18歳のときに始めました。ここに来るのが大好きです。とっても楽しいのです」と話してくれた。

サマースクールは7月18日から8月15日まで、1週間単位で開かれる。1週間泊まってスクールを受けるコースが355ポンドだが、人数にすこし余裕があるとのこと。興味のある方は RSCDS (Tel 0131 225 3854)にご連絡を。

訳者注. 新聞記事の見出しをはじめ、そのほかにも英語のわからないところはロバート（Tom 注. ロバート・テンプルトンさん。公立校の英語講師で関西 WHD 会員）の助けを借りました。Robert-sama, domo arigato gozaimashita.

（関西ホワイトヘザーダンサーズ機関紙 “Tartan Times” No.198, 19/9/2004 から転載）■

予備試験を終わって

（ケン春日）

今回予備試験を受験し、いまのやり方は受験生に途方もない緊張を強いていると、身をもって体験した。

サマースクール2004の最終日、パーティ・ルームでワインをやりながら、イアン・ホール、クリスティン・メアと懇談した。２人ともフル試験組のエギザミナーである。２人はまず、受験生がこんなにコチンコチンに緊張する試験制度は感心しないという。ティーチングでは予備試験が 20分、フル試験が 30分という持ち時間だが、クリスティンいわく、

「自分で試してみたが、かなり緻密な頭としっかりした時間配分が必要。自分も満足できるようには行かなかった」

イアンとクリスティンは

「エギザミナーは少しでも受験生の緊張を和らげるよう応ずるべき。試験開始のときもにこやかにし、あまり威厳のある態度で接しないこと。たとえばモーラグ・ネピアは個人的に接するととてもよい笑顔で話すのに、エギザミナーとして着席すると、なぜあのように意地悪そうな怖い顔になるのだろうか」

わたしもまったく同感で大きくうなずいた。

今回のクラスメートは、みなふだんは明るく、素直でよい人たちである。だが、いざ試験の場に立つと、故郷の代表として期待を一身に担っているから絶対に失敗できないと、悲壮感がただよう。

エギザミナーのジョハン・マクリーンとスタンリー・ウィルキーはティーチング試験のとき、途

中で受験生に、
「いまの箇所は何を指導しようとしているのか、もう一度やってみて」とか、「いまの指導で生徒が完全に理解したと思う？」とか口をはさむ。それでなくても緊張している受験生は、とたんに頭の中が真っ白になる。
イングランドの田舎から出てきたエバなんかは、途中でチャチャが入って組み立てていたやり方がすっかり崩れてしまい、泣き出してしまった。
ノコはレディス・チェーンの指導のとき、ジョハンから、
「いまのやり方で生徒がよく理解したと思う？」との質問が入った。ノコはとっさに生徒を見回して、「理解してくれたと思いますが」と、にこやかに答えたら、生徒が即座に「イエース！」
わたしのティーチングのときは質問が入らなかった。昼食後の１番目だったので、たぶんエギザミナーは２人とも半分眠っていたのだろう。

ダンシング試験のあと、わたしはスタンリーからストラスペイとクィックのトラベリング、セッティング計４種類を何回もやらされた。はれ上がっているふくらはぎにムチ打って、飛んだり跳ねたりベストをつくす。泣けてくるとは、このようなときに使う言葉だとつくづく思った。それをながめていたスタンリーは、
「なんだ、できるじゃないか。ダンシングでもちゃんとそれをやればいい。ウェル・ダン！」
このウェル・ダンの意味がいまだにわからない。まさかこれだけ文句をつけて“よくできた”の意味であるわけがない。“はいご苦労さん”か、“年のわりによくがんばった”くらいなのだろう。

スタンリーには習ったことがない。すこし足を引きずっておられるので、かなりのお年と思う。ジョハンには過去さんざん絞られた。この体育系の先生のダイナミックな踊り方を好まれる人もおられるが、わたしはむしろジェニー・グリーンのようなやわらかく、優雅なダンシングのほうが好ましいと思っている。

閑話休題、近々試験制度が変更されるとのこと。このような時代がかった、カビのはえた制度は改定すべきで、新しい仕組みに大いに期待している■

DVD デッキのご用意を

別項にあるとおり今夏に予定される Book 45 の映像は DVD になる、との製作元見解です。DVD はシャープな画像、見たいダンスが瞬時に見られる、安価な郵送料、という特長があります。再生専用の DVD デッキは¥15,000 くらい（録画デッキは¥60,000）です。いまのうちからご準備されるとよいでしょう■

フィドル音楽との出会いと楽しみ

（Fiddler under the Floor －
縁の下のフィドル弾きこと、益崎守生）

長く踊りを続けていますと、多くのすばらしい仲間とのほかにも、さまざまな音楽と出会い、つき合う楽しみがあります。わたしは小さいときから音楽が大好きだったようで、物心がついたころには、両親が電蓄で SP 盤（電気蓄音器で 78 回転･･･歳がバレますね）のクラシック小品などを聴いていると、まだ鉄製のレコード針を頻繁に交換しなければならなかった当時、繰り返し何度も聴かせてくれとせがんで、両親を困らせたことを憶えています。
そのためかどうか、小学校に上がる前からヴァイオリンを習い始めました。忙しくなって５年ほどでやめてしまいましたが、稽古自体は好きでしたし、音楽にすこし強くなることができて、いまでは両親にたいへん感謝しています。

その後もときどきは楽器を弾いていましたが、Book 27 で紹介された Seann Truibhas Willichan のヴァイオリン演奏が美しく、踊りの曲を演奏したいと思うようになりました。
本来スコティッシュ・カントリー・ダンシングの伴奏にはピアノやフィドル（民俗音楽奏法のヴァイオリン）が使われていたのです。卓越したアコーディオン演奏によりジミー・シャンドが数多くのファンを魅了して以来、伴奏にアコーディオンが多く使われるようになりました。日本でも 1970 年ごろに東芝 EMI から Eightsome Reel や Monymusk を含むジミー・シャンドの 17cm LP が３枚発売され、SCD 音楽といえばアコーディオンというのが一般的で、フィドルの Seann Truibhas Willichan には新鮮な印象を受けました。

フィドル以外でも同様と思いますが、一般的に曲の種類を演奏がやさしい順にならべると、Waltz、Slow Air、March 風 Reel (Irish Rover など)、Jig、Reel、Strathspey、Hornpipe となります。前述の Seann Truibhas Willichan はもっともやさしい部類の Slow Air であるにもかかわらず、練習を始めたころにはかなり苦労しました。いまではなんとか Reel、Strathspey まで弾いていますが、Hornpipe は音符の数が多くて速く、とくに弦を２本同時に使う Hal Robinson's Rant（ボストン・ブランチ 50 周年ブック）などにいたっては、弦を１本に限ってもお手上げといった状況です。

フィドルには調の得手不得手もあります。ト長調とニ長調（＃１個と２個）は演奏しやすく、ヴァイオリンの調とも呼ばれます。これは、＃が同じ弦で指を上へずらせばよいのに対し、♭では低い弦へと移動しなければ、音が出ないことがあるためです。その他 SCD ではハ長調（＃♭ともな

し）とへ長調（♭１個）も一般的です。♭２個の変ロ長調になると上記の理由で演奏が難しくなるのですが、ある程度弾けるようになって、いまでは大好きな調になっています。Muriel Johnstone 作曲の Falkirk Lass (1st Tune)や Bonnie Stronshiray (2nd Tune) がそうですね。

SCD 音楽の練習を始めてしばらくすると、それまで使っていた楽器の高音の濁りが気になって、新しい楽器を購入しました。仏ミルクールにあるアラン・モアニエ工房の製品で、高音とともに低音の伸びもよかったのですが、どちらかというと外観の美しさできめたという感じでした。そのアラン・モアニエで SBBC の桑江さんとなんどか演奏したことがあります。同氏はアマチュアのオーケストラを指導しておられ、初めての曲でもレコードを追いかけながら演奏できるほどの達人です。当然美しい音色で演奏されるのですが、一緒に演奏すると不思議と自分の楽器の音もたいへんよくなるのです。そのことを質問しますと、オーケストラと同様、よい方の音に共鳴するとのことでした。

東海ブランチ合宿のパーティでは、プロ・ピアニストの服部雅好さんがわたしの演奏を聞いてその場で楽譜を作られ、３人で合奏したこともあります。桑江さんは、わたしの主旋律が大丈夫と判断すると即興でハモられるので、わたしもリズムは服部さんに任せ、負けじとばかり思い切り弾き、非常に楽しく演奏することができました。

アラン・モアニエ製は板が薄いだけによく鳴るのですが、強く弾くと音がつぶれる弱点があり、２年前にこんどは伊クレモナで 1923 年に製作されたアリスティーデ・カヴァッリ Aristide Cavalli の楽器を購入しました。前の楽器も購入した国際楽器社では毎年弦楽器フェアを開催しており、高価なものも含め、同社が保有する楽器を手軽に手にとってみることができます。その年のフェアでわたしが試し弾きをしていると、

「フィドルですか、珍しいですね」と声をかけてくれたのが社長の松永さん、いろいろ説明してくれました。社長は商売気のない、たいへんきさくな人で、ほんとうに音楽好きなのでしょう、自分で弾きながらとても楽しそうに話をされます。後日あらためて相談にうかがった際には、

「弾いてもらったほうが、音が出るようになってありがたい」と、閉店後も数百万円もする楽器を弾かせてもらいました。さらに、

「よければ何台か持ち帰って、しばらく試してみてください」

それまでの雑談で勤務先名は知らせていたものの、名前を告げることもなく、当然預り証などもなし、こちらがどこの馬の骨ともわからないのに、２台で 300 万円もの楽器を貸してくれ、たいへん感激しました。

わたしの予算上限の楽器は、やわらかくきれいな音が出ましたが、造りがやや華奢な感じで、なによりまだ初夏というのに、肩当てなしでは楽器表面に服の布目がつくほどオイルニスが軟化していました。取り扱いの容易さと踊りの伴奏という用途を考慮して、結局モダン・イタリー・ヴァイオリンとしてはもっとも安価なアリスティーデ・カヴァッリを選びました。アルコールニスを使っているためか、音がやや硬いのですが、造りがしっかりしていて音がよく響くので、練習がまた一段と楽しくなりました。

この楽器を使って Muriel Johnstone と一緒に演奏することができたのはたいへん名誉なことで、一生のよい思い出になることと思います。

さて、楽器のことばかり書きましたが、わたしは海外旅行や出張に行く際、かならず現地のレコード店に立ち寄って、好みの音楽があれば買い求めるようにしています。また、一度耳にして気に入った曲があれば、それがなんという曲か調べようという執念があります。以前、地球環境産業技術研究機構へ出向中に、サンフランシスコからの出張の帰路、いつもなら寝て過ごす機上でしたが、たまたま聴き始めたイージーリスニングのチャンネルで、あまりにいい曲が多かったため、タイトルをつきとめたいと思いました。機内誌プログラムの曲名と演奏を一致させるため、結局関西空港に到着するまで５，６回も繰り返し聞いてしまいました。その中にシークレット・ガーデンの演奏がありました。このユニットはアイルランドの女性フィドラーとノルウェーの男性ピアニストのデュオで、ケルト、北欧、そして両者を融合した幅広く美しい演奏により、欧米では絶大な人気があります。わたしの父もたいへん気に入っており、自信を持ってお薦めできます（わたしは決してレコード会社の回し者ではありません）。

機内で聞いたロリーナ・マッケニットもケルト音楽に根ざしているほか、ヨーロッパでポール・モーリアよりも人気があるジェームス・ラストも、また、最近大人気のサラ・ブライトマンも、やはり以前にケルト音楽を手がけており、ケルト音楽はヒーリング音楽の源流となっているようです。

わたしもお金と時間があれば、ケルト音楽のスピリットともいうべきアイリッシュ・ハープを習いたいと思うのですが、本業？のフィドルがまだ縁の下の力もないので、屋根の上とはいかないまでも、せめてダンス・フロアまでには上がれるようにがんばりたいと思います。（Tom 注. “Fiddler on the Roof 屋根の上のバイオリン弾き”に引掛けた益崎さんのウィット）。

（関西ホワイトヘザーダンサーズ機関紙 “Tartan Times” No.198, 19/9/2004 から転載）■

新 CD 紹介 （Tom Toriyama）

(1) Scottish in Salem (NS116CD) by Lissa Schneckenburger & Tom Pixton

Grace Hay's Delight (8x32J), Sauchie Haugh (8x32S), Caberfei (8x32R), The Neptune Knot (Listening Air), The Athole Volunteers (8x32J), John McAlpin (8x32S), The Left-Handed Fiddler (8x32R), The Marchioness of Cornwallis (Listening Air), The Marquis of Huntly's Farewell (8x32S), Niel Gow's Lament for the Death of His Second Wife (Listening Air), Reel of the 51st Division (8x32R), The Emigrant's Adieu (Listening Air), Blue Bonnets over the Border (Waltz)

(2) Campbell's Birl (SSCD17) by Muriel Johnstone & Keith Smith

On the Wings of the Morning (8x32J), The Expert Dancers (8x32S), Davy Nick Nack (8x32R), General Ritchie's Reel (8x32J), Dear Gladys (8x32S), The Shetland Fiddler (4x32R), Montreal Rendezvous (8x 16S+16R), Just in Time (8x32J), The Spirit of the Dance (8x32S), Let's Have a Ceilidh (4x32R), The Traveller's Jig (8x32J), The Banks of Skye (4x32S), The Australian Ladies (8x32R)

(2-A) Glasgow Assembly by Bob Campbell
(2-B) Farewell, My Fancy by Bob Campbell （この２点は上記 CD ダンスのブック。）

(3) Special Requests Volume 6 (SRCD006) by Colin Dewar and his Sextet

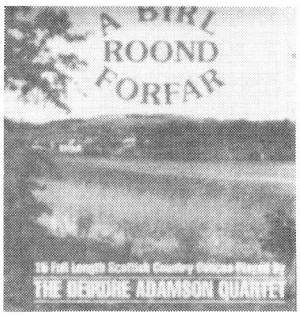
Australian Ladies* (8x32R), Ian Powrie's Farewell to Auchterarder (128J), Encore, The Braes of Breadalbane (8x32S), The Chequuered Court (8x32J), The Piper and the Penguin* (88R), Encore, Bonnie Anne (96J),Encore, The Reel of the 51st Division (8x32R), Belle of Bon Accord* (4x32S), The Flight of the Falcon* (8x32J), Robbie over the Waves* (8x32R), Balnain House* (4x40S), The Phantom Piper* (4x32J), Bonnie Stronshiray* (8x32S), Rest and be Thankful* (8x32R)
（*印ダンス説明書つき）

(4) A Birl Roond Forfar (DACD0427) by Deirdre Adamson & Her Quartet

Baldovan Reel (4x32R), The Nurseryman(8x32J), Cherrybank Gardens (3x32S), Midnight Oil (5x32J), A Birl Roond Forfar (64R), Kilkenny Castle (8x32S), White Heather Jig (4x32J), Mrs Macpherson of Inveran (8x32R), The Nor Loch (48S+48R), James Gray (4x32J), S-Locomotion (4x32S), Johnnie's Welcome Hame (8x40R), Ian Powrie's Farewell to Scotland (64S), Lady of the Lake (8x32R), Seton's Ceilidh Band (4x64J)

(5) Legacy of the Scottish Fiddle Volume 2: Tunes from the life & land of Robert Burns (CUL120D) by Alasdair Fraser, Muriel Johnstone and Natalie Haas

Watson's Scotch Measure, Muirland Willie, The Yellow-Haired Laddie ほか全 21 トラック。



(1) は、ボストン・ブランチで多年にわたり活動を続けているサリー・ディーに捧げられた CD。Salem セイラムはボストン北方の町で、大森貝塚の発見で有名なエドワード・モース博士の博物館がある。東京大田区とセイラムは姉妹都市である。閑話休題。かの女はこの町の SCD クラブの創立者でもある。サリー・ディーはさきの本部 AGM で、池間先生とおなじく、ソサエティ功労賞を受賞した。

CD にはよく踊られているタイトルもあるが、内容の半分は曲だけ、タイトルに一致する踊りはない。つまり The Athole Volunteers の名で録音されていても、このタイトルの踊りはない。曲はすべてトラディショナルか、ウィリアム・マーシャル、スコット・スキナーなどの音楽で、新曲はない。

リサ・シュネッケンバーガー（フィドル）とトム・ピクストン（ピアノ、アコーディオン）の演奏は、やや荒削りである。The Marquis of Huntly's Farewell などのストラスペイはもうすこし艶っぽく演奏してくれると、リスニングでも楽しめるのにと思う。リールはどれも躍動感がある。トム・ピクストンはピアノ、アコーディオン両方を演奏しているが、アコーディオンはさらに修行が必要かと思う。再生装置によってはピアノばかりが強調されるので、バランスのとれたプレーヤーが望ましい。 **〔注文略号：セイラムCD ¥2,600〕**

(2) は米国ワシントン州のティーチャー、アイリーン・パターソンの提案をキースとミュリアルが実現したもの。つまり故ボブ・キャンベル（正しくはキャンブル）の傑作ダンス選集である。RSCDSブックにボブのダンスはRSCDSブックにも多々あるが、この CD は Glasgow Assembly (1976) と Farewell, My Fancy (1993) という２つのプライベート・ブックからダンスを選んでいる。"Birl" はスピン、回転を意味する。

ミュリアル自身の曲の多いのは当然であるが、フレッド・モイズ作のオリジナル曲がたくさん収録されている。モダン曲が大半なため、古典スコティッシュ音楽ファンとしてはあまり面白くない代替曲選曲である。

収録レベルが小さく、ややか細い録音のため（スコットスコア社録音の共通の欠点）再生にはボリュームを上げる必要がある。ふつうの音量で聞くとキースのフィドルは繊細、せつなげにひびく。このコンビとしては習作である。

〔注文略号:ミュリアルCD ¥2,600〕
〔 同: グラスゴー・ブック ¥900〕
〔 同: フェアウエル・ブック ¥900〕

コリン・デュアー楽団の新 CD が **(3)** である。いずれもなじみのダンスで、そうでないものにはダンス説明書がついている。北米のダンサーが好んで踊る Bonnie Stronshiray はイアン・ホームズ作の音楽をつかっており、スコット・スキナーの Little John's Hame をもってベストとする北米ダンサーは「この演奏では楽しめないよ」と不満をもらすであろう。

ドラムスのガス・ミラーがスネアを多用しすぎが、しっかりしたリズムにのって軽快にスィングしている。

〔注文略号:コリン・デュアーCD ¥2,600〕

(4) はいままでに数枚の CD を出しているディアドリー・アダムソン（アコーディオン）の最新盤。タイトルを英語に直すと、A Revolve Round Forfar。トランペットを吹いているかのような、かの女の演奏スタイルはわたしにはどうもしっくりこないが、スコットランド北東部では人気のバンドである。Lady of the Lake (Book 25) が市販 CD にとりあげられるのは珍しい。

メリハリがきいていて、ゆっくりした演奏なのでダンサーには踊りやすい。ディアドリーの CD はコレクションにない、というかたはこの機会にお求めになってはいかがか。

〔注文略号:ディアドリー・アダムソンCD ¥2,600〕

(5) は米国西海岸で活躍中のフィドラー、アリスター（Alasdair とつづっても読みはアリスター）・フレイザーがミュリアル・ジョンストン、チェロのナタリー・ハースとともに作ったリスニング用の CD である。Volume 1 はポール・マハリスのピアノとのデュオで、ダンサーには今回紹介の Volume 2 のほうが親しみやすい。

副題にあるとおりロバート・バーンズが採譜した歌曲およびバーンズ時代の音楽を演奏しており、「どこかで聞いたね」という音楽が次々と耳に飛び込んでくる。SCD はいかにバーンズに助けられているかが、あらためて感じられる。

ダンス用ではないからテンポは自由に変わりその分、演奏者の音楽観、技量がはっきり現れている。アレスターの演奏はミュリアルとナタリーの好サポートをえて、感心するところが多い。BGM としても最適な CD である。

〔注文略号:アリスター・フレイザーCD ¥2,600〕

上記の商品のご注文は
郵便振替 00240－0－ 63517 東京ブランチ
締切り 2月10日（木）
（価格は送料込み）
お渡し予定 3月上旬 担当 トム鳥山■

新刊紹介

（Tom Toriyama）

「スコットランドの漱石」 多胡吉郎著

漱石・夏目金之助が英語研修のため文部省から派遣され、ロンドンに留学したのは 1900－1902 年（明治 33 - 35 年）のことであった。34 歳の漱石は西洋と日本との文明や考え方の格差、英国階級社会からくる差別、陰鬱な気候に直面して英国の友人もできないままに悶々とし、下宿に引きこもったきり。夏目はおかしくなったというわさが日本にとどくまでになった。漱石自身「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり」と回想しているほどである。

漱石は帰国直前の 1902 年 10 月、ピトロッホリ（本ではピトロクリ）のジョン・ディクソン邸を訪れた。

ロンドン在住の著者は実際にディクソン邸まで足を伸ばして漱石の足跡をたどり、このスコットランド短期滞在が漱石の精神にいかに大きく作用したか、のちの文学作品にいかに影響をあたえたか、根拠をあげて大胆に推測し、述べている。たとえば、

「草枕」冒頭の有名な一節、「山路を登りながら、こう考えた。」とあるのは、このキリクランキーの山路のことではないのか－。(p.62)

漱石はロンドンでなくエジンバラへの留学を真剣に考えたが、それを断念させたのは、きついスコットランド訛りが身についてしまう恐れであったという。また、シングルモルト・ウィスキーをもっとも早い時期に飲んだのは漱石ではないか、という面白い説も展開している。

漢字、漢語がこれでもかというほど多用され、けっして読みやすくない。むずかしい本である（文春新書 No.398 ¥724）■

キルトの下には何が（つづき）

（イアン・ガルブレイス、ロンドン・ブランチ）

前号スティーブン・ウェッブの、ずうずうしい日本のおばさんたちに出会ったという記事は面白かった。と同時に、なぜ男性ダンサーがそのような不愉快、困惑に直面させられるのかを考えた。

18 世紀のハイランダーたちは、実生活からくる理由で、キルトの下にはなにもはいていなかった。その後ハイランド連隊はふつうにこの慣習をとりいれ、軍隊がそうであったと同様に、何もはかないことが誇りであり、かつそうすべきものとなった。すると、ステッキに鏡をとりつけるといういたずら陸軍下士官がでてきたり、キルトを着たら２階建バスの上階に上ったりしない、床のものを拾うときは身を曲げたりしない、などが行なわれた。

1745 年の内乱後、連隊を除いてスコットランドではハイランド服装の着用が禁止された。数十年後に禁止令が解除されたとき、ハイランドの恰好、つまりキルトを再着用しようと考えたジェントリーはたった１人で、かれはどのように着たらいいかを軍隊に尋ねたのである。こんにち、正しい着方とされるものは、ほとんど 19 世紀の軍服がそのルーツである。個人的にいえば、わたしはキルトを現代市民のドレスとして着ている。制服ではなく、また奇抜な服装とも思っていない。

連隊式ドレス・コードに忠実でありたいと思っているダンサーは、スポーツやダンシングにおける下着着用を、コードに反すると考えるかもしれないね（“The naked truth” by Ian Galbraith, from The Reel No.250, Dec 2004 – Feb 2005, by the courtesy of the RSCDS London）■

ダンスの予約について

（アンドルー・パターソン、ロンドン・ブランチ）

ダンスが始まった。「踊っていただけませんか？」。「ごめんなさい、前半のダンスはみんな予約済みなの。後半の２ダンスなら空いてますけれど」。これがふつうなのだろうか？

たぶんそうなのだろう。この“予約”というやり方はますます蔓延しつつあり、１人ないし２人のお気に入りのパートナーとだけ踊るのが、どこでも行なわれている。

わたしにとっては、このやり方はスコティッシュ・カントリー・ダンシングのソシャル性とまったく相反するだけでなく、ビジターに無礼であり、（盛会とするために出席を呼びかけた）経験の少ないダンサーへの思いやりに欠けるものである。もちろん、ある特定のダンスについてこの人と踊りたい、ということもあろう。しかし、つぎの２ダンスを越え、先のさきまでパートナーを予約するべきではない。

このような風潮に是正策はあるだろうか？おそらく、ない。“予約屋”はどこにでもおり、２、３人のパートナーで全ダンスを踊ろうと、虎視眈々とダンスフロアをうろついている。だが、少なくとも、そのような申込みがあったとき、不快感を与えずに辞退することは、まったく正しいと考えるべきである（“Booking dances” by Andrew Patterson, from The Reel No.250, Dec 2004 – Feb 2005, by the courtesy of the RSCDS London）■

グループ行事案内

新宿カントリーダンスクラブ
20 周年パーティ
２月６日（日）5-9 時
グランドヒル市谷（市ヶ谷駅５分）
¥6, 500
振替 00140-8-350190
「新宿カントリーダンスクラブ」でお申込を
増本サチ子　03-3357-4776

葛飾スコティッシュカントリーダンスクラブ
19 周年パーティ
午前講習会（講師クレメント篤子）
午後パーティ
３月 27 日（日）10－4 時
葛飾区総合スポーツセンター　エイトホール
（青砥駅・立石駅 15 分）
¥3, 000
振替 00130-0-41921「尾身信晴」でお申込を
尾身信晴　03-3697-5838

江の島スコティッシュシスル
ファーストパーティ
４月 30 日（土）11－3. 30
藤沢市民会館　2F
（藤沢駅 10 分）¥1, 500
三木真理　0466-81-9961

次号は４月発行予定。5 月-7 月のお知らせ乞う

レター原稿を募集しています

意見・感想・ダンス紀行・趣味などなんでも結構です。編集担当までお寄せください。

215-0017　川崎市麻生区王禅寺西 6-9-21
トム鳥山　Tel/Fax 044-988-773
e-mail Tomtori@aol.com